

代表 山田あすか（立命館大学理工学部建築都市デザイン学科 講師）
委員 山田 和幸（名古屋大学工学部社会環境工学科建築学コース 学部生）
委員 生田 京子（名古屋大学大学院工学研究科 助手）
委員 山下 哲郎（名古屋大学大学院工学研究科 助教授）

〔研究報告要旨〕

近年、認知症高齢者ケアを目的とした居住施設の一形態として認知症高齢者グループホームが注目されている。グループホームは、小規模で家庭的な環境での主体的生活が認知症症状の進行や身体機能低下の緩和に効果があると期待されている。

グループホームの空間構成は様々であるが、居室と共用空間の関係、複数の共用空間同士の関係など、空間構成と入居者の生活の有り様にどのような関係があるかについては、未だ明らかになされていない。

本調査研究は、入居者の滞在様態とグループホームの空間との関係を明らかにし、もってグループホームのあるべき空間構成について考察することを目的とする。

本研究は、第Ⅰ部、第Ⅱ部からなる。

第Ⅰ部ではまず、文献調査とアンケート調査によるグループホームの平面事例の収集を行った。次に、3章でグループホームの空間構成を、「居室と共用空間の関係」「（複数の）共用空間同士の関係」に着目して「廊下型・混合型・ホール型」「一体型・分節型・分割型」へ類型化し、これに基づいてグループホームの計画動向の整理を行った。また、アンケート調査の結果を整理し、既存建物改修型のグループホームについて運営者が感じるメリットとデメリットを整理した。さらに、4章では空間構成類型の異なる6つの民家改修型グループホームでの入居者の滞在場所を調べる終日観察調査の結果から、入居者の属性を勘案しつつグループホームの空間構成が入居者の滞在場所に与える影響について考察した。最後に、5章では改修によって空間構成類型が変化したグループホームの事例をとりあげ、空間構成の変化が入居者の滞在場所に与える影響について考察した。

第Ⅱ部では、4つの民家改修型グループホームでの観察調査に基づき、入居者の視線：なにを見ているか、と対人距離に着目して、共用空間の空間構成や、共用空間の広さ、家具のスケールや配置などの建築要素のあり方について検討している。まず、2章で入居者の生活と入居者の一日の行動、ADLや認知症の程度と行為内容の関係を整理し、3章では入居者の行為を「会話のみ」「見る、眺める」「無為」に分類して、行為種別ごとに居合わせる他者との距離、姿勢（向き）のとり方、視線を比較して、それぞれの特性を明らかにした。4章では総括として、無為状態を軽減し会話を促すための空間スケールや設えのとり方、入居者の座席の配置などについて提言を述べている。